

山と博物館

第29巻 第11号 1984年11月25日

大町山岳博物館



オーストリアへ贈られたカモシカ「大」(右)とありし日の「博美」

カモシカ親善使節のアクシデント

オーストリアからニホンカモシカニホンカモシカひと番を贈ってほしいとの要請に応じて、山岳博物館で繁殖したカモシカを贈ることになりました。ニホンカモシカがヨーロッパに渡るのは百年ぶりのことです。

贈られたのは、日本での人工哺育成功第1号である大助と保護されたあつ子の第6仔の「大」(オス・昭和51年6月7日生)と、共に保護された山と沢子の第5仔の「博美」(メス・昭和55年8月6日生)の2頭です。

10月26日、2頭の歡送会が開かれ、関係者の多くが山岳博物館庭に集まりました。高橋市長の「元気で立派に親善使節の役目を果たしてほしい」とのことばの後、保育園児のカモシカに贈る歌「はっぱのごちそう」の大合唱に送られ、検疫所のある成田に向って旅立ちました。

「大」と「博美」は成田検疫所で検疫の後11月5日、成田空港を発ちオーストリアへ向いました。このカモシカより一足先にインスブルック入りしていた博物館長より連絡が入りました。それは無事到着の報ではなく、「博美」が11月6日現地時間の正午に西ドイツのフランクフルト空港で死亡が確認されたというものでした。詳しい死亡原因などは不明ですが、長旅の疲れなどではないかと推定され、関係者を残念がらせました。もう1頭の「大」の方は無事オーストリアに到着し、ウィーンウィーンのシェンブルン動物園に収容されました。

「博美」の死亡は残念至極であります。異国の地に逝った博美の冥福を祈ると共に、博美に代るカモシカを贈るべく、現在その作業を続けています。

カモシカを贈った大町市と受けたインスブルック市・アルペン動物園・ウィーン市シェンブルン動物園と山岳博物館の友好のため、米春アルプス・マーモットが贈られてくる予定になっています。両市と両動物園と山岳博物館の友好関係がより深まるものと期待されています。

山の文学者 深田久弥さん

丸山 彰

深田さんは、実によく山に登り、たくさん山の本を書いた。これほど広く日本の山々に登り、たくさん山の文章を書いた人はいないと思う。稀にみる山の大家であり、山の文学者である。探検時代は既に過ぎていたこともあって初登攀の記録もなければ、海外登山の大遠征隊の指揮をとったなどということもないが、ただ山が好きで好きでたまらなくて、多くの山に登ったという人である。

深田さんの山登りには、気どりの飾りもなかった。ピッケルを小脇に、ザイルを肩にといた、いかめしいところがなく、日常生活とあまり変らない無頓着な服装で日本の山々を歩き続けた。書かれた文章は、簡潔、平明で解り易く、山への愛情が溢れるものであった。

深田さんは、明治三六年(一九〇三)石川県江沼郡大聖寺町(現在の加賀市)の紙商の家に生まれた。漢詩に興味をもつ父の影響からか、幼い時から本が好きで、着物の懐に本を離さず、暇さえあれば読んでいたという。小学校六年生の時、大聖寺町が一望に見える富士写ヶ岳(九四二メートル)に登ったのが初めての登山であった。この時「足が強い」とほめられて気をよくし、山に登るようになったと述懐している。母の出生地、福井中学へ入学すると、先輩に山の好きな医学生がいて薫陶を受け、ますます山に傾倒していった。大正十一年、第一高等学校に入学、長い休みを利用して本格的な山登りが始まる。一五年、東京帝国大学文学部哲学科に入学した五月、八ヶ岳硫黄岳で同行の友人吉村恭一君の遭難死にあう悲運に見舞われ悩むが、登山は

止めなかった。

この年発表された「武人鑑賞録」が、横光利一、川端康成氏に認められ「文学」の同人となり文壇入りをする。昭和五年、小説「オロツコの娘」を文芸春秋に発表、好評を得た後大学を中退し創作活動に入る。

学生時代、数年にわたって山々を歩いて書いた紀行や随筆を新聞や雑誌に載せていたがこれをまとめて、昭和九年「わが山々」を上梓した。初めての山の著作集であった。この本の「白馬」の章に、山岳映画撮影同行の記が載っている。この映画は、新興キネマ社が雄大な山岳を背景にした美しい絵を作りたいたと企画されたもので、ロケ地の選定を深田さんが頼まれて同行した。小山内薫原作の「鹿界」を、村田実が監督し、撮影を青島順一郎、主演者中野英治で、白馬岳を中心に制作された。「山の呼び声」と解題されて上映されたが、美しい山や山麓の閑静な風景を私は今でも鮮やかに覚えている。山を美しく捉えて撮った青島順一郎の名前はその時覚えた。

素映らしい山岳劇映画だった。深田さんが参画していたとは、後で読んでわが



高瀬川第5発電所沈砂池の深田久弥氏(右)と岩波の田村義也氏(筆者写す)

山々で知った次第である。その後「山岳展望」「山の幸」「津軽の野づら」「高原」「峠」などをつぎつぎと上梓した。山の愛好者たちを魅了した。私もその一人であった。

昭和一六年三月下旬、私はこの愛読書の著者に会える幸運に恵まれた。前年、鎌倉の山田珠樹さんのお宅で深田さんと酒を酌み交し、よい時を過ごして大町に帰った百瀬慎太郎さんが「乗鞍岳スキーの会」に参加して下山する深田さんを松本で迎えるために、出向くことになった。淋しがり屋の百瀬さんは、佳い人に会わせるからと私を誘ってくださった。私は大喜びで一緒に、松本駅前の食堂の二階で初めて深田さんにお会いした。深田さん三八歳、百瀬さん五〇歳、私が二四歳の時であった。深田さんを、庶民的で威張らず気どらず、雑草のように素朴で心の温い人と評した人がいたが、やはりその通りの人で嬉しかった。その時、色紙にのびのびの言葉を書いていただいた。

北に遠ざかりて 白き山あり
この白い山は、平重衡が一ノ谷合戦に敗れ捕えられ 鎌倉に護送される途中、傷心のなかで見た山のことだ。「平家物語・海道下り」に出てくる。

宇治の山辺の萬の道 心ほそくも打越えて手越(註・現解岡市内の地名)を過ぎゆけば北に遠ざかって雪白き山あり、問えば「甲斐の白根という」重衡は落ちる涙を押えながら「惜しからぬ命なれども今日までに、つれなき甲斐の白根をも見つ」と詠んだ。哀切の一戦である。色紙は今、大切に私の手許にある。

戦争が終って間もないある冬、私は、山を描いて有名な一水会の山川勇一郎画伯と八方スキー場で知り合えた。画伯は、深田さんと故郷を同じくする三〇年来の気の合う山友達であった。その後、画伯とは親しく交遊をいたっていたが、昭和三二年の夏、画伯から山行の誘いを受けた。深田さんと笠ヶ

岳へ登るから一緒に行くことだった。勇躍参加したかったが、勤めの都合で行かぬので残念ながら、湯俣まででも同行することにした。

八月二〇日、台風を気にしながら、夜の臨時列車で新宿を発った深田さんを、早朝の大町駅に迎えた。私には久しぶりの懐しい対面であった。山川画伯は、昨夜は燕山荘泊りで直接高瀬川へ下りて湯俣で落ち合うことになっていた。同行する岩波書店の田村義也さんと、荷物のためにお願いしたガイドの大西幸一さんを加えた四人は、バスで七倉へ。七倉からは頼んでおいた軌道のトロツコに乗せてもらい湯俣に向かった。途中、トロツコの上でつぎつぎと移り替わる高瀬渓谷の美しさに見られる深田さんの顔の何と穏やかで幸福そうであったことか。山を愛してきた人の、山へ入る時の幸福な顔であった。

そしてその夜、燕岳から湯俣へ下りてきた山川画伯と友人の高見歌太郎画伯が加わって湯俣温泉の小屋の前にゴザを敷いての夜宴が始まった。深田さんの酒の好きなおは予てから聞いていた。深酔はするが朗らかない酒で、縄のれんなどで飲んで酔うほどに隣席の誰とも構わず肩を組んで、世の中は義理人情だよ、などと大声をあげる微笑ましい酔い方をすると聞いていた。然しその夜の宴では、陶然と酔い、安曇節を所望し、和やかな温顔は至福そのものであった。

翌朝、快晴に恵まれて、一行は湯俣川を溯つて笠ヶ岳へ向かい、私は大町へ下った。同じ年の一〇月下旬、私の勤める大町南高校の文化祭の講演に深田さんをお願いして来ていた。この受諾の陰には、序に撞れの雨飾山へ登りたいという願いがあつた。全校生徒の前に「山と文学」の演題で話されたが、失礼ながら文章のような流麗さはなく訥訥とした話であった。後で読んだ本の中に、講演に関わつてつぎのような言葉があつた。山と人生とか山と文学という題の原稿や講

演を時々頼まれるが困ってしまう。登山という単純率直な行為を、私は人生とか文学とかいう物々しいものに結びつけて考えたことがない。たまには抽象的な理屈をつけようとするのですが、どうしてもしつくりこない。しよせん私などは高村光太郎の「山へ行き何をしてくる。山へ行きみししみし歩き水飲んでくる」の類か。深田さんらしい言葉である。講演を終った夜、大町山岳博物館が主催した座談会を開いたその中に、大町保健所長の古原和美さんがいた。深田さんとは初めての出会いであったが、後日のヒマラヤ探査行の縁でここで生まれた。

翌日、後から大町に着いた深田さんが山妻と呼ぶ志げ子夫人と山川画伯、深田、私の四人は、雨飾山に登るため、バスで小谷温泉に向かった。雨飾山は、深田さんの久恋の山で「山頂山麓」につきのように書いてある。

「山は心をあとに残すところがいい。」と言った人があった。山に出かけても、その頂を極めることが出来ずして帰って来たことが幾度もある。一べんで目的を果してしまつた山よりも登りそびれて振り返り振り返り他日を約しながら帰る山の方が、遙かに印象が深い。



雨飾山頂における左から深田、志げ子夫人、山川、室谷(カイト) 1957年10月14日(筆者写す)

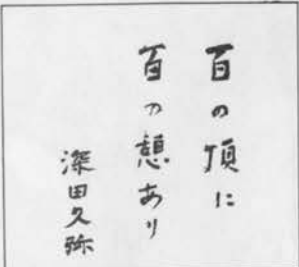
を距てて、一つそびえている山が忘れられなかった。それが雨飾山である。高さは二千米に一寸足りない位だが、その気品のある山の形は、その響のよい名前と共に、永い間僕の胸のうちに秘められていた。

最初は越後側の梶山新湯に泊り、登路を探したが見つからず、二度目は信州側から登ろうとしたが、小谷温泉で四日間雨に降りこめられて断念し、心残りの山となったという。

今度の三度目は、素晴らしい天候に恵まれた。登路が判り難いからと、宿主・山田寛さんが頼んでくれた葛草連の室谷福一さんを案内に出発した。一点の曇もない快晴、紅葉の真盛りの中を「奇麗だ、奇麗だ」と感嘆の声をあげながら頂上を目指した。渡渉、藪こぎ、滝の高まきなど苦しい登行の末、ようやく頂上に立つことができた。

ついに私は久恋の雨飾山の頂に立った。しかも天は隈なく晴れて、秋の午後三時の太陽は、見渡す山々の上に静かな光をおいていた。すべての頂には憩いがある。梢にはそよとの風もなくて、小鳥は森に黙した。風化し磨滅した、石の祠と数体の小さな石仏の傍らに私たちは身を横たえて、たゞ静寂の時の過ぎるのに任せた。「日本百名山」二行は満足感を胸に、星空の下を懐中電灯を頼りに小谷温泉へ下り、あたたかい湯につかり恵まれた山行を喜びあった。この紀行は、笠ヶ岳と共に「わが愛する山々」にも詳しく載っている。

イギリスが三〇年来、登頂を試みてきたエベレストが、昭和二十八年に登頂された。深田さんのヒマラヤ研究は、これを機に本格化した。今までも山の蔵書は、



「日本百名山」発刊の折、記念に筆者に贈られた色紙

「エベレストへの長い道(訳書)」「ヒマラヤの高峯・五巻」など名著を残すが、執筆をしながら「私といえどそう老いたわけではない……八千米の水壁を攀じるのは無理であろうが……七千米前後の山なら、ひよつとして私ごときでも初登頂の喜びを得られるかもしれない。いや、それも無理なら、五千米くらい登って、永遠の山の姿を眺めてくれるだけでもいい……。」(「ヒマラヤ・山と人」と

夥しい数に達していたが、これに加えてヒマラヤの文献をつぎつぎと購入し、文献は九山山房(住居の名前)に溢れた。高価な買物は家計を貧窮に追いやったが、購入を迷う夫に購入の決断を与えたのは志げ子夫人だったといわれている。夫人は、真のよき理解者であった。



樽池における座談会の折、左から穂刈貞雄、遠藤三春、深田久弥、百瀬美江各氏と筆者(女性2人は百瀬慎太郎氏息女)・1968年5月

ヒマラヤへの夢がふくらむ。

この夢は、画家山川勇一郎、医師古原和美、写真家風見武秀と作家の四人によるジュガール・ヒマール探査となって実現する。この山行は「雲の上の道」に、息のとまるような素晴らしい眺めだった。北方の紺碧の空に、氷雪に輝くヒマラヤを、今こそ私は自分の肉眼で見た……と随所に驚きと感動を書いており、山を思う気持の深さが伝ってくる。

四一年一月、深田さんの著書に挿絵を描き装丁をし行を共にした、山友達山川勇一郎画伯が、チリの山・アンデスの氷河で亡くなった。深田夫妻は深い悲しみに暮れた。

四六年三月二日、山梨県の茅ヶ岳(一七〇四メートル)へ日本山岳会の友人藤島敏男さんと登山中の深田さんが頂上近くで脳溢血のために急逝された。風のない穏やかな春の日であった。行年六八歳はまだ早かった。読光文学賞に輝く名著「日本百名山」に続いて、記録と写真をもとに執筆中だった「世界百名山」は急逝により四一座で絶筆となった。ほんとうに惜しい人を亡くしてしまった。志げ子未亡人は一年後の「アルプ」一〇月号に「私の小谷温泉」と題し雨飾山の思い出を語つた後、画伯と夫は宿世の縁が深いのでしようか、お墓も同じ大聖寺の本光寺に三〇メートルほど距つて建てております。お墓参りに行くとき晴れた日は白山がよく見えます」と追慕の文章を書いたが、五三年三月二五日、後を追うように傷ましい交通事故で昇天した。哀惜の限りである。

雨飾山に登った五人のうち四人が逝つた。あの時のことを語る者は誰もいない。胸がつかまる思いである。

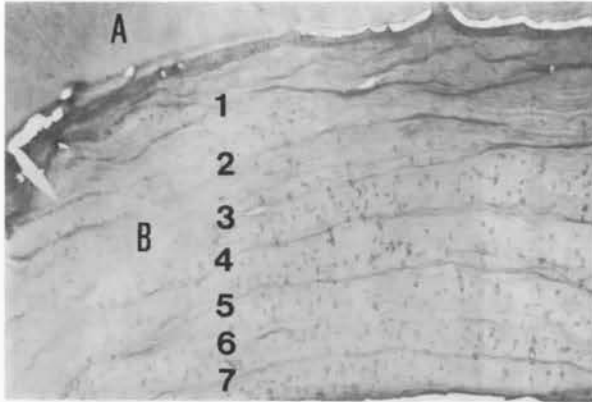
深田さんの墓石には「よく読み、よく登りよく書いた」と刻まれている。

深田久弥・志げ子ご夫妻と山川勇一郎画伯の眠る加賀・本光寺に想いを馳せて筆を擱く。(元大町高等学校教諭 日本山岳会員)

カモシカの角と年齢

三浦慎悟

一九七九年から岐阜・長野両県下でカモシカの大量捕殺が始まるなかで、ニホンジカとの比較でカモシカ個体群の動態や社会に興味をもっていた私の手元に、これら捕殺されたカモシカ標本の一部がまわってくることになつた。それらは下顎骨や角であつた。すでに何も語らない無機質な物体に変わつてはいたが、そこには、彼らが生きてきた生活の歴史が刻印されているはずであつた。その残像のすべてを汲み尽くすこと、沢山の標本を前にしてそれが私たちの役割だと思えてならなかつた。これら为基础として、私は成長や発育、個体群の動態、人口学的解析といった生態学の諸課題を追求してみようと思つた。



歯のセメント質にみられる年輪(数字は年齢)

私は、このうち後者の方法を採用して、標本から歯を抜き取り、硬いカルシウムを取り除き、ミクロトームにかけ薄い切片にして顕微鏡で覗くという作業を繰り返した。結果は予想通りで、どの歯のセメント質にも明瞭な層板が観察された。しかし、問題はこれら層板がはたして「年輪」と呼べるものかどうか

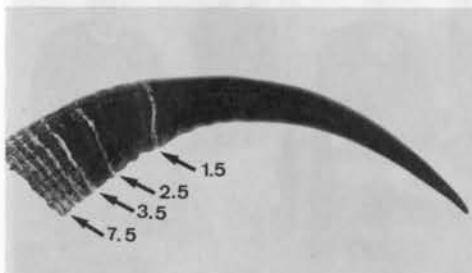


角質内にみられる成長線

を正確に知ることであつた。これは「輪査定」と呼ばれる野生動物生物学の基礎的な分野の一つで、様々な動物でその方法が検討されてきた。それらは二つの方法に大別できる。一つは、歯の交換や磨滅、加齢にもなる骨や体形の連続的变化を追跡する方法で、古くから様々な部位の変化が沢山の動物で記載されてきたが、一般に、個体変異が大きく、成長初期を除くと不正確であるといえる。もう一つの方法は、歯のセメント質や象牙質にみられるいわゆる「年輪」によるもので、現在では最も精度の高い方法として数多くの種類に適用されている。原理は樹木の年輪と同じで、生理・栄養条件の季節的变化を層構造として反映する組織を見出し、通常代謝の低下する冬季の層板を染色し、そして年輪を査定することによって越冬回数を、そして年齢を査定するという方法である。

かであつた。そこで、各地の飼育施設や動物園で生まれ死亡した年齢がはっきりわかつてきたカモシカ標本にあたり、この方法を適用した。いずれの標本にも層板はみられ、その数は飼育年数と完全に一致していた。こうして、この方法はカモシカに対しても有効であることが確認された。

しかし、かなり面倒な作業が必要であるなどこの方法にも欠点があつたし、何よりも生きた個体に適用しにくい点は私にはすこぶる不満であつた。もつと簡便で生きていてもその年齢がわかるような方法がないものか。試行錯誤がなお続くなかで、私の目は次第に角に注がれていった。文献をみると、アメリカのビッグ・ホーンやヨーロッパのシヤモアでは、角をとりまく輪状の節(角輪)が毎年冬からできる年齢形質であることがわかつていたからである。確かに、カモシカの角にも輪状の節や隆起、複雑な凹凸がみられたが、それが単純に年齢と対応しているようにはみえなかつた。しかし、それらの凹凸は角質(ツメ)などをつくる硬タンパク(一種)の成長の痕跡であるからには何か年齢と対応しているはずだ、という確信めいたものが私にはあつた。X線



角の表面にみられる角輪(数字は年齢)

が見えた。切つた時はぬれていて光線の具合も悪かつたと思え、まるで気付かないものだつた。それは角質の成長の跡(成長線)であり、年齢と対応する可能性のあるものであつた。興奮のなかでとりあえず私は角を薄く切り取り漂白し、適当な染色液で染めてみた。そこにははつきりとした成長線があらわれていた。何とも美しいものにみえた。その成長線は角の形に対応してA字状で、角はその内側にそつて角質を堆積しつづつ成長することをはつきりと物語つていた。年齢のわかつてい

る角も含めて何本かの角を切つてみた。いずれも成長線がみられ、それらを検討すると、最初の成長線は一・五才の冬に形成され、以後毎冬一本ずつつけ加わることがわかつた。さらに注目できることは、これらの成長線は、角の表面の形のうち、輪状になつた深い切れ込みだけに結びつき、成長線の数がこのリングに完全に対応していることがわかつた。その他にみられる隆起や凹凸は、いわば成長のうねりとも言えるもので、年齢とは直接関係のないものであることがわかつた。したがつて、カモシカの年齢は、角の深い切れ込みのリングの数に一才をプラスするだけで良かったのである。

彼らの残した形見から、彼らの実像にせまる努力を私はこれからも模索していきたいと思つている。

(兵庫医科大学生物化学教室助手)

山と博物館 第29巻 第11号
 発行所 長野県大町市 TEL:0261-2211
 印刷所 長野県大町市後町 大米タイムス印刷部
 定価 年額一、二〇〇円(送料共(切手不可))
 郵便振替口座番号(長野四)一三三一九三